

Title	<書評>混淆の美 : ヨーロッパにおけるイスラム・パターン (淡交社・中井貞次)
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 1979, 18, p. 127-129
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53718">https://doi.org/10.18910/53718</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 混淆の美

—ヨーロッパにおけるイスラム・パターン—

(淡交社・中井貞二)

この書は「生活のなかの色と形」というシリーズ全6巻の第4巻にあたるものである。この書の成立は、中井氏が序のところで述べておられるように、1974～75年の一年間、文化庁の派遣した芸術家在外研修員として、ヨーロッパ各国でテキスタイル・アートを主に対象として実地調査、研究された、いわば報告書の一つともいうべきものである。

この書では、副題のとおり、ヨーロッパにおけるイスラム・パターンが取り扱われていて、続巻として、第5巻がロマネスクの美、第6巻がタピスリーの美として、予定されている。

序につづいて、(1)キリスト教美術とイスラム教美術の出会いから混淆まで、(2)アンダルシアにおける混淆の美、(3)アントニオ・ガウディの建築と装飾の3部分に分け、カラーとモノクロあわせて300枚近い写真が提示され、次いでそれに対する本文がおさめられている。

「キリスト教美術とイスラム教美術との出会いと混淆」では、まず、イタリアのシチリア島のパレルモのモンレアレ大聖堂と修道院、スペインのワダルベの大聖堂と修道院、及びトレドの大聖堂を対象としている。ついで、「アンダルシアにおける混淆の美」ではコルドバのメスキータ、グラナダのアルハンブラ宮殿とフェネラリーフェ離宮があつかわれ、終章の「アントニオ・ガウディの建築と装飾」ではバルセロナのサグラダ・ファミリア、ゲル公園、コロニア・ゲル教会、カサ・パトリヨ、及びカサ・ミラを取りあつかっている。

本書は楽しい書物である。難解な文章を追う必要はなく、美しい映像が、自ら美しさを語りかけてくれる。それは映像の対象が美しいだけでなく、美しい対象を美しい映像として、鋭い感性をもった目でとらえ、定着させたものであるからである。

プロのカメラマンの場合、カメラマンの主観的要素が介在して、つい、対象の美しさ以上のものが表現されてしまうことがある。中井氏がプロのカメラマン意識とは異った角度か

ら、ごく自然に映像を写されたから、対象の美しさを殺さずに、表現されていると思える。P 10のパレルモ、モンレアレ修道院の回廊柱身のモザイク（12世紀）の金色は秀逸といえよう、ここでは、プロのカメラマンの批評など聞きたくなくなる。ただ一つ、難くせをつけるならば、P 51の41図、「セゴビアのアルカザールの外壁の装飾」だけが、ピントが甘く、他のものが鮮明なだけに気になった。

さて、本文はすでに述べたとおり、図版と対応している。いいかえると本文のために図版が構成されている。その構成の仕方はまことに見事である。周辺から次第にせめて行つて、本質の核心にふれている。シチリア、北アフリカ、そしてスペイン本国にイスラム教文化の波がおしよせて行つた。第2章のアンダルシアにその華やかな開花を見せている。この点に関しては、誰も疑う者はなく、きわめて説得力に富んでいる。アルハンブラ宮殿はまさにイスラム美術の粋といつてよい。しかし、それはあくまで過去である。時間的なへだたりにおいて私達はそれを見ているのであり、それが、即ち、時間的へだたりこそが重要な鍵である。そして、その時間的へだたりが、次第になくなって行くところ、そこに、アントニオ・ガウディが姿をあらわす。それが現代である。そこには、混淆はもはや二つの要素が別々に見られるのではなく、一つのスタイルを表現している。私は、かつて、ガウディをアール・ヌーボーの一つとして理解していた。その限りにおける、ガウディのオリエンタリズムの影響を見ていた。けれども、中井氏によって示されたものは、もはや、アール・ヌーボーとは、異質とはいわれないまでも、アール・ヌーボーとしてガウディを理解することの誤解が明らかになったように思える。強いといえば、アール・ヌーボー様式が、ガウディの様式を流入したということにならうか。それよりも、私はガウディに、現代のカタルニア様式の成立を認めたい。中井氏はそのことに近づきながら、カタルニア様式という言葉を用いてはいない。それは、彼の謙譲さによるものと解したい。

中井氏は作家である。造形作家である。しかし、あえて、美術の世界に、記述を通して挑戦されたことを祝福する。本人自身も冒頭で述べられているが、たしかに、姿は同じことであろう。造形作品をつくることと、文章を書くこととは、決して同じではない。表現手段の違いは同一に論じられることではない。けれども、一番大事なことは、見ることの感性の鋭さであろう。それは出発点ということで、出発点をあやまれば、目的地には到底たどりつくことはできない。

評者は少し甘く評価しすぎているかも知れない。そこで、最後に苦言を呈するならば、混淆の美という言葉は、正にそのとおりであり、読者には了解しやすいが、私としては、それに創造性を感じさせる言葉を探し出してほしかったと思う。今一つの苦言は、ペルシア文化の発生、展開した地域をティグリス・ユーフラテス両河流域というのは一考してい

ただきたい。それから、これは、本文中に図版番号を入れて下されば読む者にとって便利であろう。

元井 能